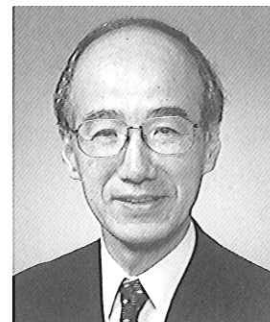


フジコー技報14号によせて

産学連携について

九州工業大学
学長

下村 輝夫
Teruo Shimomura



産学連携が叫ばれてから久しく、改めて言及する必要性がないように思われますが、そのスピードは想像以上に速いと感じられます。今日の産業メカニズムは、R&Dを核として、マテリアル—製造装置—デバイス—アプリケーション—ビジネスモデルが積層されています。地域産業と呼ぶ場合に、どの程度のエリアを指すかは別にして、拡大する世界経済ならびにグローバル社会の構造変化と強い相関を有するようになりました。すなわち、先進国の成長は鈍化し、BRICs等開発途上国の実質GDPは増加すると予測されています。先進国は少子高齢化、労働力人口の減少が進み、高度情報化・高コスト化社会へと変化しています。一方、途上国は先進国への急速なキャッチ・アップを図り、巨大な中産階級の出現により、大量生産・大量消費へと経済発展型社会へと移行しつつあります。併せて、原油高に象徴されるエネルギー問題が、大きくクローズアップされつつあります。

このような背景を踏まえて、自立的な地域経済開発が重要な位置付けとなりました。核となる価値の源泉は、他と差別化できる財産（アセット）です。「日本ものづくり大賞」に象徴されるオンリーワンの技術やコンテンツと言えるかも知れません。さらに、利用可能な技術、適用可能なスキルを有した人材、良好なコミュニケーション等のソフト・インフラを有機的連携に活かしたクラスターが求められます。

技術ベースを地域経済開発とする試みは、米国のベン・フランクリン・プログラムやエジソン・プログラムが有名です。これらのプログラムの目的は、地域の企業、地域の大学・研究機関を核とした地域経済開発により、付加価値の高い産業を育成、集積し、質の高い雇用確保にあります。知の価値を事業の価値に変換するためには、革新性や卓越性と言った「技術/知識の価値」がマーケットで評価されることが不可欠です。地域資源の活用とともに出口戦略が要求されます。

北九州市と福岡市における東証一部上場企業数は、合計70社のうち製造業は12社です。東京大田区や東大阪市、京都市、浜松市等と比較すると、製造業の比率は必ずしも高くありません。産業クラスターは、親企業に連なる関連企業の数と質によって決まる訳ですから、新しい価値創造の多様な産学連携モデルを構築することが求められます。俳諧の聖人と言われる松尾芭蕉の言葉に「不易流行」があります。変えてはいけない基礎の部分と絶えず革新性を追い求めねばならない部分のバランスの重要性を示唆した言葉ですが、産学連携の理想を表現した言葉であるとも言えます。「独創的な技術開発」を開発理念とされ、「不易流行」を実践されている株式会社フジコーの更なるご発展を祈念申し上げます。

【略 歴 書】

しもむら てるお
下 村 輝 夫

昭和20年 2月14日生

【学歴】

九州工業大学工学部第一部電気工学科 昭和44年3月卒業

九州工業大学大学院工学研究科修士課程電気工学専攻 昭和46年3月修了

【学位】

工学博士（東京工業大学） 昭和54年

【専攻分野】

応用光学、計測工学

【職歴】

昭和46年 4月 九州芸術工科大学芸術工学部助手

昭和58年 4月 九州工業大学工学部講師

昭和59年 4月 九州工業大学工学部助教授

昭和62年 8月 九州工業大学工学部教授

平成 5年 5月 九州工業大学地域共同研究センター長 （平成7年5月まで）

平成 8年10月 九州工業大学評議員 （平成12年4月まで）

平成10年10月 九州工業大学工学部長 （平成12年9月まで）

平成14年10月 九州工業大学工学部長 （平成15年9月まで）

平成15年10月 九州工業大学学長

現在に至る